リュシアン・ゴールドマンの小説の社会学について

——「構造的」文学史方法批判——

濱田明

I

小説の社会学とは何か。たとえば最近だされたローベル・エスクラピの『文学の社会学』(Sociologie de la littérature, P.U.F. 1964) などでは文学の内容そのものを問題にせず文学の付随的社会的問題を扱っている。つまり作家・読者・書物・出版・反響などといった文学の外的諸要素を統計的に調べ上げようとする純粋に社会学的な研究である。エスクラピはもちろん文学理論史も一部では考慮にいれているが彼がそこで扱うのは一般社会に流通している表面的文学現象の調査にすぎない。

これに対してリュシアン・ゴールドマンの「小説の社会学」は直接に文学の内容に関するものである。彼はその社会学研究の方法を文学研究に移行させ、あるいはむしろ社会学と文学とを文学研究のなかで統一させ、独自の新しい文学理論および文学史の方法を構成しようと試みている。それは文学内容を社会的背景から分析し判断するものであり、その意味で「小説の社会学」はどちらかといえば小説研究が主眼であり純粋の社会学ではない。

批評史から見れば、おおざっぱにいって、テーヌの「博物学」、ブリュヌチエールの「生物学的ジャンルの進化説」およびチボーデの「批評の生理学」において、それぞれ自然科学の方法論が批評の要因になっているが、ゴールドマンの「小説の社会学」もこのような意味で受け取るべきであり、その文学研究の基本的態度は極度に文学中心であり社会学的ではない。もっとも、チボーデの批評が生理学的である以上にゴールドマンの文学研究は社会学的であるといえる。それは彼自身が社会学的文学研究家であることは別にして、その根本方法において文学を社会背景から説明しようと試みるからである。

ゴールドマンは『小説のひとつの社会学のために』(Pour une sociologie du roman ; Lucien Goldmann, éd. Gallimard, 1964) において彼の文学史方法およびその実践的批評研究を併せて明らかにしている。これを見れば、われわれが従来批評史においてみてきた伝統的立場とは全く異質の新らしい立場であることが知れる。フランスにおける批評史の一般的捉え方は、とくにサント＝ブーヴ以降テーヌ、ブリュヌチェール、ランソン、チボーデといった「歴史的方法」の伝統的系統に従うものである。P・モローやR・ファイヨールの『文学批評史』のおおすじも伝統的立場からみたものである。ゴールドマンの批評家としての名前はファイヨールやP・ド・ボワデッフルによってとりあげられているが、それもことのついでにといった程度にすぎない。

右に述べた伝統的系統は一応チボーデをもって終っている。それは方法論的時代が二十世紀初頭以後崩壊したということであり、同時に十九世紀的文学理論を支える文学・社会風土も有効ではなくなったということである。文学史および文学批評の方法論は、チボーデやブリュヌチェールの例にもみられるように、何らかのメタフィジックな基盤、広い意味でのイデオロギー的背景に支えられたものであった。たとえばブリュヌチェールの文学史観はダーウイン流の進化論を土台にしたものであり、チボーデの批評理論はベルグソン的思想に裏付けされている。これに対してゴールドマンの試みは伝統的方法とはある意味で全く異質の立場から理論を構成しようとするものである。

彼は社会科学の方法によって社会構造から文学現象を説明する。これは、二十世紀初頭のチボーデなどの文学現象を文学の内部から解き明かす立場とは逆に、文学の外部からあるいは文学を成立させる社会的構成諸要素を包括する広い視野からこれを分析し判断しようと試みるのである。彼の文学批評は同時に社会批評・経済批評ないしは文化諸現象に対する批評であるべきであって、それらが彼の社会科学理論に統一されることになるのである。これは伝統的文学批評の流れからみれば全く新らしいひとつの立場である。しかし、巨視的に見れば、それは十九世紀末に存在した科学的方法の復活と見れないこともない。

彼はルッカチの弟子としてそのマルクス主義理論に基く社会学を発展させ、そこから新らしい独自の文学理論の構成を試みるが、この場合、彼の社会学が純粋に社会学なのかそれとも文学研究の手段なのかということは形式上の問題であって重要ではない。人間の意識現象が社会構造の反映であり、その意識現象の尖鋭な表示が文学であるとする見方は、チボーデなどの伝統的文学史家と同じ見方である。ただチボーデなどが個人の側からそれを感覚的に捉えていたのに対して、文学の社会性というものをポジティブに理論化して解明しようとするのである。この文学の社会性の理論化ということはチボーデなどの批評方法において致命的に欠けていたことであり、結局到達しえなかったことである。ゴールドマンが今

日これを試みうるということは、そのイデオロギーをも含めて、時代の推移に負うものというべきである。

II

ゴールドマンの方法は構造社会学的文学研究の立場によるものである。これは、それ以前の経験主義あるいは内容主義の社会学への批判の立場からだされたものであるが、その理論実践は彼もいうように仮説の域をでないものであり、とくに文学批評への適用は従来の伝統的方法と較べ合わせるとかなり荒削りなものであることは否定できない。

彼の方法が伝統的方法と何らかのつながりがあるのか、それともそれと並行して社会学独自の発展のなかから今日に到って文学批評面に合流したかということについては、彼自身何らの言及もなく、明らかではない。直接的には、彼は古い社会学的文学研究の批判から彼の理論を構成している。

社会学的文学研究は何よりもまず個人社会集団との関係から文学現象を明らかにするところにある。ゴールドマンはここで個人と社会集団との関係においてテーマを立てる三つの立場について述べている。それは、経験主義（内容主義）ロマン主義、構造主義である。経験主義あるいは内容主義においては個々の現象が重視され個人が主要テーマにされるが、このような方法では文学現象は「偶然的」なものとしてしか捉えられない。文学作品は作家の経験による社会的現象の部分的な表現であって、それをそのまま見ることは全体の関係を失うことであり一種の逸話調査にすぎなくなる。一方、ロマン主義的立場は逆に社会の集合性 collectivité に重点を置き個々の問題を付帯現象として捉える。このような素朴な社会学においては社会と創造的個人の関係は単純化され、外面的にならざるをえない。これは、作家が平凡で文学史的流れの中ですでに評価の定まった中庸なものに対しては有効であるが、作家個人の優れた独得の想像力の理解についてはアプローチが不可能である。

このような両極にある立場を統一するのがルカーチなどの構造主義である。これは社会的集合性を唯一の真の主題とするが、個人との複雑な相互関係をも組み入れるものである。それは、文学現象に現われたさまざまな関係を分析しそれらを集合的単位に再構成することによってそれを明らかにし、個人相互間の関係集団——家庭、職業、国家、階級など——によってそれぞれのもつ意識を理解しようとする。そして、文学創造は集団的な性格をもつとし、作品の世界はその社会集団の知的構成に対態するとするのである。

ゴールドマンはこのような構造的立場をさらに進め、社会と個人との間に「現実的状況」という要素を加えて考えている。彼は過去のすべての立場に反して、文学創造における作家の独自な想像力を重視し、優れた作家ほど現実の社会内での知的構成から乖離するものと見る。作家の意識はもちろんその社会的構成諸要素と密接な関係をもつが、その想像の世界においては完全な自由をもつと考えるのである。これは

彼のカフカやカミュに対する見方、あるいは後に述べるヌーボーロマン論とくにロブ＝グリエに対する考えに現わされている。また、社会構成という点においても、それは静的固定的なものとせず、社会・経済における変動、その時々の状況に応じて変化する動的なものとして捉える。これは後に述べる彼の「小説史」の考え方に明らかに示されている。

これらをまとめてみると次の四点になる。

(1)文学作品は現実の与えられた集団的意識 conscience collective の単なる反映ではなく、動的で常に別の均衡へと向う集団的意識を示すものである。

(2)集団的意識と優れた個人的文学創造との関係は内容の一致にあるのでなく、より進んだ統一・構造の同質性のなかにある。それは一般的意識の現実の内容から極端に異る想像的内容によって説明されうる。（ヌーボーロマンなどを例に考えているのであろう）。

(3)社会グループの知的構造に対応する作品は非常に稀であるが、このグループとあまり関係のない個人によって、ある場合に、つくられる。作品の社会的性格はとりわけ個人がひとりで≪世界のヴィジョン≫と呼ばれるものに対応する知的構造をつくることができない。そのような構造は集団によってしかつくられない。個人はそれをより高い統一に押しあげ想像的創造の平面にそれを置き換えるだけである。（これはバルザックに関する説明ともいえよう。）

(4)集合的意識は、最初からそれ独自のものでなく、経済・政治・社会的生活に参加する各個人の大きな集りによって、状況に従って動的に構成されるものである。

以上がゴールドマンの構造的社会学による文学現象の受けとり方である。そして彼の文学史の方法ないし文学研究の実践はこのような対象把握の前提に立っておこなわれる。彼のいわゆる構造的文学史は、文学現象に表わされた諸事象を社会構造の裏付けによって分析し、それらの諸事象を一見関係のないと思われる事象をも包含させながらひとつの構造に統一することによってなされる。そしてその実際上の手続きは、

(1)文学作品および作家に見られる諸事象を分析しまず最初に予備的な分類をおこない、

(2)つぎに、その時代の知的・政治的・社会的・経済的生活のなかで構成された社会的グループを検討し、

(3)それにより、部分的要素として研究された文学作品を統合し、それと他の作家・作品との間に明瞭な関係ずけをおこない、できれば類縁関係をも立てる、

ということである。

ゴールドマンにおいては、作品の構造を明らかにすることはその作品を理解することであり、その作品をより大きい構造のなかに挿入することはそれを説明することである。このようにして個別的なものと集合的なものとを互いに関係ずけながら理解と説明の操作をおこなっていこうとする。たとえば、ジャンセニスムの専門家であるゴールドマンは、パスカ

ルとラシーヌについて次のような方法を例としてあげている。一応それを要約すると、(1)パスカルの「パンセ」、ラシーヌの悲劇の構造に光を当てることは理解の過程である。(2)ラシーヌの劇の構造を分析しそれらの作品を過激ジャンセニスムのなかへ挿入することは、ラシーヌとの関係においてそれを理解することであり、パスカルとラシーヌの作品の関係において説明する過程である。(3)過激ジャンセンスムをジャンセニスムの全歴史のなかに挿入することは前者を説明し後者を理解することである。(4)ジャンセンスムを思想的表示活動として十七世紀の貴族の歴史のなかに挿入することは、ジャンセニスムを説明することであり貴族階級を理解することである。(5)貴族階級の歴史をフランス社会史のなかに挿入することは、前者を説明しながら後者を理解すること である。(6)その他の諸要素にわたって、右のような相関関係を立て、それにより全体の構成をおこなう。

これがゴールドマンの構造的方法のひとつの例である。彼もいうように、この社会科学的立場には個人的機能の問題が残されたままである。彼は過去の社会学的方法が個人の個有の資質を無視したとして批判し、作家独自のヴイジョンを全体的構造とは別に自由なものとして認めなければならないとするのであるが、その場合外的な科学主義では理解できない問題が残される。そこでそれを補うものとして心理分析の要素を構造主義のなかに加えることによって完全なものにしようとする。しかし、この場合心理分析主義はあくまでも科学的なものとして受けとられており、直観ないしは研究者独自の感覚によるものとしてではない(1)。

(1)ゴールドマンの構造的方法は社会学の領域からなされたものである。彼は文学史構成の問題において、文学批評における伝統的諸流派に対する言及はおこなっていない。彼の社会構造論においては、すでに古典的になってはいるがテーヌやブリユヌチェールなどの環境説と類似の点がないことはない。また彼が「心理分析」というとき、フロイドなどの名前がまずあげられるが、批評史的に見れば常識的にいってチボーデの心理分析的方法が言及されてしかるべきである。チボーデの「創造的批評」は、ゴールドマンの社会科学的立場からみれば異質のものかも知れないが、それはいかなる「科学的」心理分析もおこないえない文学現象の理解に有効なものであって無視されるべきではない。もちろん、チボーデの「共調」による文学認識はある意味で非科学的である。しかし研究者個人の資質による直接的感覚と理解力を非科学的として捨象すれば、ゴールドマン自身が重要な要素とする作品および作家独自の想像的創造の要素は捉ええないのではないか。ゴールドマンの科学主義はここにひとつの問題を残している。

III

ゴールドマンの仮説の際立ったひとつの例は、社会構造の変化—とくに経済構造の変化—と小説形態の変化が対応するという理論である。彼はこの理論をマルクスの資本論およびルカッチなどから受け継いでいるが、現代のヌーボーロマンの理論によりさらにそれを具体化させたように思われる。

小説ジャンルは十九世紀中葉、とくに三〇年および四十八年の革命の頃から現われ始めたとし、小説の社会学がまず最初に近ずくべき問題は、小説形態と社会構造との関係、文学ジャンルとしての小説と近代個人主義社会との関係であるとする。近代社会生活において重要な部分をなす経済生活において、諸事物間・人間間の関係はそれ以前の素朴な関係から遠ざかり、質的なものから量的なものへ、人間的なものから非人間的なものへ変化する。(これをゴールドマンは dégrader という言葉で表現している。) つまり、近代社会において市場向けに生産される商品が、人間間、人間と事物との関係を疎外し、価値観念が変化し、全てが交換価値の方向に向うことになる。つまり物神化 (réification、ルカッチの言葉では fétichisme) である。このような価値の異常化 dégradation が精神生活においてもなされ、小説形式はまさにその点から現われてくるのである。このような価値の異常化が極限まで進むと価値の消滅にまで到ることになる。(ゴールドマンはここでロブグリエの小説理論を採用しているように思われる。)

ルカッチの公式によれば、まず小説は作家の倫理が作品の美学的問題となる唯一のジャンルであり、小説の主人公はこの倫理の問題を小説形式のなかで実践する「問題的主人公 héros problématique」である。そして、主人公自身が社会から「外れた」人間であり、その人間が「異常化 dégradé」した社会に対して正当な価値を要求するのが一般的小説形式であるとする(1)。小説の人物は従って「悪魔的」であり「犯罪者」であり「問題児」となる。この反正統的な人間が正統な価値を追求するのが、個人主義社会における小説ジャンルである。ルカーチはこのような見方から、文学を個人と社会との断絶によって生み出されるとし、その断絶の程度により文学ジャンルを区分している。つまり、断絶の極端なものは悲劇および抒情詩の形態をとり、断絶のないものあるいは部分的なものは叙事詩および小話 conte の形態をとろうとする。小説は叙事詩的ジャンルの特異な形式であり、右の二つのものの中間に位置するものであると規定する(2)。

(1)ゴールドマンはこの小説の主人公の定義について、『赤と黒』のジュリアン・ソレルや『ボヴァリ夫人』のエンマについては正しいが、バルザックの小説の場合はあてはまらないとして、制限つきで受けとっている。

(2)ブリュヌチェールのジャンル論やチボーデの批評論文のなかで小説ジャンルが叙事詩から発展したとすると見方がすでになされている。また、小説は作家の倫理が作品の美学的問題となる唯一の文学ジャンルであるとするルカッチの見方は、チボーデなどの見方と同じである。ただしチボーデの場合はジャンルによって区別するのではなく、内容によって他のジャンルをも含め、近代文学の特徴を個人的倫理の問題とする。

ゴールドマンは原則的にはルカッチの考えと同じであるが、それがある期間では有効であるが、とくに戦後の小説に関しては説明しえないとする。彼は、(1)経済的要因・交換価

値の増大により近代社会の精神内容に「媒介 médiation」の要素が増大し、全体を仮りの意識に置き換えて行くとし、(2)個人は「問題的 problématique」なものとしては残るが、それは質的なものとしてよりも量的なものとしてであり、さらに、芸術家・文学者の作品は質的なものに支配されるが社会全体の物神化からのがれられず、また「社会から外化され」異常化されるのは作家ないしは作中人物だけでなく一般社会においてもそうなのである、とし、(3)いかなる作品も純粋に個人的経験の表現たりえず、小説は近代（西洋）ブルジョア社会に生ずる社会的価値としての個人と、この社会的現実がもたらす個人の限界との内的矛盾からでてくる、とするのである。そして小説は、主人公の伝記形式（1）から次第に主人公不在の形式へと移行するのである(2)。

(1)サント＝ブーヴやチボーデにおいて、文学の捉え方は伝記主義である。とくにチボーデは主人公の伝記を作者の伝記から説明し、主人公の問題を直接的に作者の問題として見ている。彼がバルザックの小説を外的なものと規定し興味を示さなかったのはこの点においてである。チボーデはゴールドマン流の社会科学とは無縁であるが、この捉え方の共通点は意味深い。

(2)主人公不在の小説というのはロブ＝ダリエなどの新らしい小説を念頭に置いてのことであろう。

このような見方に立ってゴールドマンは小説史を次の三期間に区別している。(1)十九世紀半ばから一九一〇年前後まで（古典的小説）(2)一九一〇年前後から一九四五年まで（変遷期の小説）(3)一九四五年以降（新らしい時代の小説）。

まず古典的小説は、（西洋）自由交換経済の時期と対応し、小説は個人の伝記的要素に特徴ずけられる。この時期においては、概念化されない感情的不満、質的な価値への直接の要求が小説の要素である。主人公は「問題的」なものとして、伝記形式で小説世界に描かれる。それは徐々に増大しつつある人間的価値の仮りの価値への移行によって、常に主人公の悲劇に終る形式をとる。作家も主人公も正統性を主張しながらも、積極的な姿勢でそれを追求しえない(1)。

(1)チボーデの『ボヴァリ夫人』論とゴールドマンのこの説明とを考え合わせると興味深い。エンマ・ボヴァリの悲劇的結末をブリュヌチェールは常規を逸した女の恋愛の破綻とするのに対して、チボーデは、それを恋愛の破綻でなくブルジョア社会に附随する金銭上の破綻と見る。そして、エンマの没落は古いブルジョア社会の没落であり、「崩れゆく人間性のひときれ」を表わし、同時に新らしいタイプのブルジョアであるオメの勝利を示すものである、としている。ただし、チボーデはこれに対して積極的な価値判断をしているのではなく、作者フローベルと同様に社会内部の批判にとどまっている。

つぎに、一九一〇年前後から一九四五年に到る期間は小説の変遷期と考えられる。これは資本の独占化による経済構造と一致する時期であり、価値の物神化が深化する時期とされる。この時期の小説には伝統的な小説に見られる「道義的・人間的 humaniste」立場が残っているが、伝記的要素が少

くなり個人の重要性が見られなくなる。小説の内容としての伝記が、作家の社会とは違った価値体系によって置き換えられる。小説は主人公の「物語」から一種のアレゴリーへと変形していく。これは、カフカの小説、サルトルの『呕吐』、カミュの『異邦人』、あるいはサロートの小説が代表するものである。

最後に、一九四五年以降の小説は、ロブ＝グリエによって際立って示されるヌーボーロマンである。この現代小説の世界は国家管理経済による社会構造と対応し、人間的価値の否定された事物の世界を描く。それは、「問題的主人公 héros problématique」に代わるものを作ることを断念し、個人的伝記を他の現実に置き換える試みを放棄し、テーマのない小説を書く努力、価値不在の小説を書く努力によって構成される小説である。演劇の面ではベケットなどの「不在の演劇」によって示されるものである。しかし、この小説は伝統的小説の内容と類縁関係をもち、まだ内容を与える小説形式を保持している。

以上がゴールドマンの小説史的見方である。彼の小説史に対する時代区分は結果的には正しいかも知れないが、それはむしろ現象面から判断したものであって、経済構造の変化とそれぞれの小説形態とを対応させるのは少々飛躍があるように思える。また、彼の小説ジャンル規定からすれば、現代より社会構造が更に進展した場合、小説形態はどうなるのか。ヌーボーロマンの先はどうなるのか(1)、あるいは、社会体制の変革とともに、（西洋）ブルジョア社会固有のジャンルである小説形式は消滅するのか否か、その点について答えられていない(2)。

(1)ゴールドマンの近代小説史の見方は、まずヌーボーロマンについて社会構造と小説形態を分析した後、逆にさかのぼって理論化したようである。彼が小説理論を構成する際、サロートやロブ＝グリエの見方に啓発されたことは、その「ロブ＝グリエ論」の冒頭に記されている通りである。

(2)ゴールドマンは、むしろバルザックの小説を正統なものとして考えている。正統な小説形式の側にポジティブな主人公をもつ小説があるとし、その系統に第一級のものではないが優れたものとしてはA・デュマやE・シューの小説があるとしている。一般に伝統的な小説はポジティブな主人公をもたないが、それは本質的に（西洋）ブルジョア社会に対する批判であり抵抗の形式であるとしている。これはある意味でゴールドマンの考えの飛躍とも見られる。たとえば、ロブ＝グリエは文学におけるイデオロギー的判断はしていない。この意味はともかくとして、一般に、内部から見る立場がゴールドマンには欠けているようである。

IV

ゴールドマンの小説理論および小説史に対する見方は、小説の社会学的構造あるいは（西洋）ブルジョア経済からでてくるという小説ジャンルの固有性という観点で、その極限の形態である現代のヌーボーロマンのなかに際立って図式的な

構造を見、それからさかのぼって過去の小説を見たともいえる。少くとも、彼にとって小説の形態と（経済学的背景の）社会構造との対応の図式はヌーボーロマンにおいて尖鋭に表われているのであり、事実、彼がロブ＝グリエなどの新らしい小説の作家との座談やそれらの小説研究によって現代小説の状況を直接的に理解したのである。これはルカッチなどの一世代前の「社会学的」小説研究には不可能なことであり、ゴールドマンとの差異を生じさせたものである。

しかし、ヌーボーロマンそのものの立場ないしは小説理論とゴールドマンの右のような小説構造理論との間にはその姿勢においてかなりの差があるのであって、ヌーボーロマンの理論が完全にゴールドマンの理論によって説明されうるわけではない。それは小説家の実践者としての立場と批評家の理論構成者との立場との相差であるとともに、文学に対する接近の姿勢の微妙な相違でもある。ロブ＝グリエなどの小説変革の試みは、内在的に文学史上の伝統的立場が集積されて現代に到って初めて実現されたものであり、そこには、過去の小説における作家の心理・描写方法・文体などといった純粋に文学的要素への批判が含まれているのである。これに対して、ゴールドマンの見方はある意味で文学とは全く系統の異る領域から、構造的に外的に小説理論を構成するのである。もちろん、この二つの立場は多くの場合外面的に一致し、とくにロブ＝グリエが小説理論を先に立て現代の特殊な文学的状況を思想的に先取りするような理論化をおこなっているところから、ゴールドマンの考えに即応する面もでてくるのである。しかし、ロブ＝グリエは結局は文学の領域にとどまっているのであり、ゴールドマンのようにイデオロギーとの関連において文学創造を考えるわけではない(1)。

(1) ロブ＝グリエの新らしいレアリスムの理論は何よりもまず伝統的小説を支配する「人間主義的 humaniste」要素を排除することから始められる。なぜならばこの「人間主義的」要素は近代・現代社会において仮りの虚構のものであって、人間の真実を示すものではないからである。今日、人間的という言葉は果して真に人間的なものを表わしているであろうか。一九世紀以来社会が複雑化し人間と人間との関係は事物によって距てられてきたにもかかわらず、依然として伝統的なヒューマニズムの曖昧な意味の世界にわれわれは住んでいるのではないだろうか。このような曖昧さ意味の二重性のなかで正確な現実把握が不可能であるにもかかわらず、全てをロマンチックなヒューマニズムに還元するところに近代、現代社会における悲劇が生ずるのである。それは何よりもまずにせの人間主義の悲劇である。カミュはこの悲劇的ヒューマニズムを不条理という言葉で表わし、『異邦人』においてその不条理を解き明かし真の人間性をとり戻そうとしたが、結局不可能なままで終った。以上がロブ＝グリエの基本的思想である。

そして、このような現実世界における意味の虚構性から抜けだすためには、にせの人間性の世界を否定し意味の世界を排除しなければならないとする。事物は事物であってそれ以上のものではなく、また人間はそこにある「もの」であってそれ以上のものを求めるべきではないとする。小説創造においても作家は人間および事物の世界に意味を与え、漠然としたヒューマニズムで対象を

描写すべきではないとし、伝統的小説は作者全知の立場から人物に意味を与え事物をロマンチックに解釈し、結局仮りのヒューマニズムに支配され瞞されているのであると考えられる。このような立場からロブグリエは意味を否定した世界、あらゆる価値を信用せず「ただそこにあるもの」が構成する対象事物 objet の世界だけを描写しようとするのである。

従って、文体の面においても、事物に意味を与える描写は否定すべきであるとされる。ロブ＝グリエによれば「事物の表面は lisse であり nette であり intacte である」。だから事物に意味を与えるメタフォールやアナロジーは排除しなければならない。「雲が駆ける」「谷間に貧しい村がうずくまる」などの表現は当然のこととして、（海辺に光る）「残酷な太陽の光」あるいは「私はマロニエの根であった」などにおいてはまだ事物の精神化、にせのヒューマニズムによる意味の二重化がおこなわれているのである。ロブ＝グリエがカミュやサルトル小説の手法と伝統的な側に押し入れるのもこのためである。

ロブ＝グリエのこのような理論は作家としての立場からなされるものであり、もちろん背景には現代社会の状況あるいは現象認識を含むものであるが、それを社会思想の面から説明することはしない。ゴールドマンは、おそらく、このロブ＝グリエの新らしい小説の理論を組み入れながら、外的には彼の構造社会学の方法で小説理論を構成しているように思われるのである。

ゴールドマンはサロートとロブ＝グリエの小説を区別して、サロートの小説を一時代古いつまり彼の小説史区分の第二の段階（一九一〇年代から一九四五年まで）に入れて考えている。それはサロートの小説には十九世紀以来の伝統的小説に見られる主人公の伝記的要素および手法としての心理主義がまだ残っているからであり、ロブ＝グリエに見られる意味の世界の排除がなされていないからである。ゴールドマンの定式では、ヌーボーロマンに表わされる小説形式は極度に深化した「物神化 réification」の社会構造の反映であり、質的・人間的価値の消滅した現実世界に即応するものである。その意味で、ロブ＝グリエの意味を否定した事物対象 objet で構成される小説が現代において有効な形式であるとするのである。このようにしてゴールドマンは彼の構造社会学を適用しながらロブ＝グリエの小説を分析・説明する。たとえば『覗く男 Voyeur(1)』について次のような解釈をしている。

(1)『覗く男 voyeur』という題名についてロブ＝グリエの研究家の間ではこれまで問題になったことはないようである。私見では、これは voir（見る）と voyageur（行商旅行者）とを併せ含めたものと思われる。Voyeur という言葉そのものをとった場合意味は平俗になり、このような受けとり方では B・モリセットのように主人公を「変態的精神異状者」と考えがちである。しかし、この小説の内容およびテーマからすれば現実世界を「見る旅行者」でなければならない。この場合の「旅行者」とはカミュの「異邦人 étranger」に与えられたと同じような意図で作者によって与えられたのではないか。ロブ＝グリエの別の小説『嫉妬 Jalousie』は同じ言葉が「鎧戸」というもうひとつの意味があり、実際に小説のなかで「鎧戸」が表わす意味は重要でありここでもタイトル二重化がなされている。

主人公マチアスが腕時計の行商に行った「島」はそれ自体ひとつの世界として作者によって描かれている。それは現代社会縮図を示し住人たちも現代の社会構造のなかで生きる人間を表わしている。その「島」のひとりの小女を主人公は犯して殺すが、その犯罪は事実上「島」の人びとによって黙殺される。見撃者は少くとも二人いたが彼らはそれを証言しようとしない。それは殺された少女が「島」の秩序を乱す嫌われ者であったからである。一方、殺人者マチアスは罪を咎められず、彼自身は自分の行為を粉飾しアリバイを立て常に目撃されたのではないかと恐れながら「島」を「見て」廻るが結局なんらの追求もうけず去っていく。

ゴールドマンはここで、「島」の住人はマチアスの犯行を知っていながらそれを咎めないのは、彼らが自己の秩序に外れた人間の消滅に本質的に興味を示さないからだとする。彼らは現代社会体制の物質化され価値を奪われた構造のなかで、受動的に生活するだけであり、社会を質的に変化させたり、人間的にするための意志と可能性を奪われているのであるとする。住人たちは単なる受動的観察者 voyeurs passifs にすぎず、犯罪でさえ無視するまでに到っているのである。逆に殺人が罰せられるべきであると少しでも考えるのはマチアス自身である。この小説世界では、二人の異常者――少女とマチアス――が逆に人間的価値をわずかでも示しているのである。少女の常軌を逸した自由で奔放な私生活はこの「島」での唯一の自由意志の表示であって、その行動が「島」の社会秩序を混乱させたことによって、「島」の社会組織からはみでることになったのである。

ゴールドマンはこの小説世界を現実に置き換え、現代社会構造のなかではこれに類した無数の犯罪がなされ、しかもそれが許容されるという二重の犯罪がおこなわれていると考えるのである。この小説において作者が表わそうとしたのは、個人的行動のあらゆる意味あらゆる価値の消滅ということであり、そしてそれは現代小説のもっともリアリステックな作品であるとするのである(1)。

(1)ゴールドマンのこのような見方は、『覗く男』や同じロブ＝グリエの『消しゴム』においては有効であろう。しかし、ヌーボーロマンの他の作家あるいはロブ＝グリエの他の小説においてはかなり無理な面もあるように思われる。彼の小説はゴールドマンが説明するように実用的な立場で書かれたものではない。間接的には社会・現代世界の体制への批判として受けとられるかも知れないが、彼のように直接的な社会批判と考えるのは少々独善的である。

ロブ＝グリエは少くとも文学創造においては政治的意図を表わしてはいない。彼のいうように、彼がアンガジェするのは文学に対してであって、文学作品はその意味からまず文学の内部から見ていく必要がある。ゴールドマンの考え方では、彼のその他の作品たとえば『嫉妬』や『迷路のなかで』などは社会学的説明はむつかしいのである。ロブ＝グリエの小説は一方では文学の伝統との関係から他方では現実社会との関係から、直接的で深い文学意識によって構成されており、たとえ同じことの説明であっても、

ゴールドマンのように概念化し図式化すれば、その文学内容は少々稀薄にならないではない。

V

以上がゴールドマンの構造的文学史理論、およびそれに基く小説研究方法の概略である。これは彼もいうようにまだ仮説の域にあって、文学史および文学理論の全般にわたって完全に被いつくすものではない。しかし、フランス批評史において、十九世紀初頭で断絶した方法論的伝統が、文学固有のものでなく別の領域から新らしい構成論が示されたことは注目に価する。

そしてこの場合、彼の社会学からの方学への接近は何よりもまず彼の方法を支えるメタフイジックによって特徴ずけられている。社会構造から理解し説明する古典悲劇論、経済構造の変化に対応するとする小説形態論およびその小説形態の最も極限の形式として考えるヌーボーロマン論などにそれは示されている。しかし、彼の理論は構造論としては十分な説得力をもっているが現実の個々の文学現象の説明には不充分な要素も見られる。さらに、彼のイデオロギーとその小説ジャンル規定との間には微妙な矛盾も見られるのである。

つまり、ゴールドマンの理論は次の諸点において問題が残されるのである。

(1) 小説形式は十九世紀の（西洋）ブルジョア社会の出現と同時に現われ、それは価値の異常化 dégradé された社会における正統な価値の追求の形式とされるが、仮りに社会の変革がおこなわれた場合、小説形式は消滅するのか否か。

(2) 小説研究を社会科学のの方法によっておこなうことによって、小説そのものが（文学として）伝統的にもつ個人的要素が残されはしないか。外的に理解される小説はよいとして、作家の個人的意識または文学作品内での心理的要素は捉え難いのではないか。（彼はバルザックの小説を正統なものとしそれに類するものとしてA・デュマやE・シューの小説をあげているのは、彼の理論の可能性の方向を示しているようである。）

(3) 彼の構造社会学による文学研究は小説ジャンルと他の文学ジャンルとに画一的に適用されないのではないか。たとえばラシーヌの悲劇の研究方法で彼が示す「理解」と「説明」のプロセスをそのまま小説研究に当てはめた場合どうなるのか。彼の小説史規定の際、社会経済構造の変化にあてはめて考えるが、たとえば一九一〇年代から一九四五年に到る期間の「変遷期」の小説において、カフカやカミュの小説を同一形態としてしまう危険性はないだろうか。

以上の諸点から見て、ゴールドマンの理論には一貫して文学現象における内部的要素、文学作品また作家の独自性ないしは心理的面が問題として残されているように思えるのである。